

東洋學書考抄

石濱純太郎

一 シラブプロキトの滿洲文選

この書はロルキエの支那學書錄 (H. Cordier: *Bibliotheca Sinica*. Vol. IV. Paris, 1907 col. 2755) に次の如く著録されてゐる。

Chrestomathie mandchou, ou Recueil de textes mandchou, destiné aux personnes qui veulent s'occuper de l'étude de cette langue; par J. Klapproth. Imprimé par autorisation de Mgr. le Garde des Sceaux, à l'Imprimerie royale. M. DCCC. XXVIII, in-8, pp. XII-273 sans lerrata.

別に變じた事があるもので無しが、最後の正誤表なしが少し氣になるのである。次に露國大藏省の滿洲地誌 (Opisanije Mančžurii. Sostavleno v Kanceljarii Minictra Finansov pod redakciej Dimitrija Pozdneeva. Tom II. Priloženija. S.-Peterburg, 1897. Priloženie X. Bibliografija Mančžurii, str. 19.) を見ると、上記の文中のシラブプロキト編と云ふ句を闕した儘に同文の本書を學け正誤表なし送出である。尙ほ其下に同人として

Chrestomathie mandchou ou recueil de textes Mandchou. Paris, 1828. 8°.

と掲げている。これを又見て見ると二本有るかとの疑を生ずる。然しシラブプロキト遺書目録 (Catalogue des livres imprimés, des manuscrits et des ouvrages chinois, tartares, japonais, etc., composant la bibliothèque de feu M. Klapproth. Première Partie. Paris, 1839.

p. 52)には本書を二部著録してゐるが、別に相異なる様にも記してゐないし、卷尾索引中の著作年表にも何等及ぶ所もないのである。たゞ余が見るを得たる二部を以てすると、二本ある様である。

其一是正しくコルデエの著録に合するものと思ふのであるが、遺憾な事には二七二頁迄しかなく最後を脱落してゐるので、正誤表が有るか無いかは確め得ないのである。其二是原形の儘で改装はしてゐないと思はれる本だが、序文と其前の表題大題の二枚ともなく、然も最後に正誤表の一頁が添加されてゐる。二七三頁の裏は白紙で次の頁に表がある。そこで此二部と諸家の著録とを参照して見ると、最初の刊本は序文あり目録あり正誤表なきものであつて、別に序文なく従つて序文最後の頁の裏即ち拾貳頁に當る目録もなく、而して最後に正誤表を加えた一本が後に出たものらしい。第二本は大題の頁がないから刊記がなく年は分らないが、紙質より見れば餘り年は隔らぬだらうか。尙ほ精細に調べて見ると、滿文名賢集は二三頁で終つてゐるが、第一本は二三頁の裏が白紙

で、其次頁に感應篇等三篇の道教經典の題名があり、其裏頁が亦白紙で、其次頁からその滿洲文になり、其裏頁には二六頁と丁付もあつて以下に續くが、第二本では二三頁の裏が感應篇等の題名で、其次頁は滿洲文が始まり、其裏は同じく二六頁の丁付ある滿文が續いてゐる。だから第二本は頁數が連続するが、第一本では白紙の頁を數へては連続しないのである。こゝ丈別の紙を挿入してゐる事となつてゐる。蓋し第二本では第一本のこゝを改訂したのである。尙ほ露清條約文の首の所も白紙二頁が同様に改訂されて頁數を連続させてゐる。こゝでは大題の頁も改印されてゐる。

以上の證によつて、本書に二種あり、原刊は序文目録を具したものでまだ正誤表の無いもの、後刊は序文目録を佚脱し正誤表を附したるものなるを知る事が出来る。

二 蒙文馬太傳と約翰傳

ラウフェルの蒙古文獻錄 (B. Laufer: Skizze der mongolischen Literatur. Keleti Szemle, VIII. kötet.

Budapest, 1907. S. 256, note 3.) のカルマク語聖書の條下の註に、カルマク語約翰傳の別行本の事を記した後、「馬太傳は蒙古語で一八一九年聖彼得堡にて、馬可傳と路加傳は一八二一年に出版された」と出てゐる。こんな註の中に有るのだから、蒙古語でと斷つてあつても少し不思議な感じがする。蒙古語が蒙古文語の事ならば文語翻譯の條に解説すべきではないかとも思はれるのだ。或は是れはラウフェルの親しく見たものによつて記したのでなく、何かの記載に依據したのでかう云ふ風になつてゐるのかも知れない。

蒙古文語の新約聖書はスタリブラスとスワン (Edward Stallybrass and W. Swan) とによつて出来上つたんだが、その底本には露國聖書會社の成果を利用したとラウフェルも書いてゐる。此兩人は舊約聖書の翻譯に際しても、シュミット (I. J. Schmidt) の校閲を経たのであつて、その原稿は大英博物館に保存されてゐる。隨つて上記の露都舊刊本が文語とすれば、固り参考したものに相違ない。ラウフェルは何とも記さないが、是等舊

刊本の譯者が必ずシュミットである事も推知し得る。果してコワレフスキの字書の参考書目中に (Joseph Etienne Kowalewski: Dictionnaire mongol-russe-français. Tome I. Kasan, 1844. p. VIII et X.) 福音書(四種かどうか分らない)と使徒行傳がシュミット譯として掲げられてゐる。惜しい事には刊行年月は出てゐない。たゞ使徒行傳には聖彼得堡聖書會社の出版と出てゐるので、出版地は分る。

余は馬太傳と約翰傳との合本になつたのを知り計りである。大約縦十五種横三〇・五種の長方形紙に大約縦十一種半横二十六種半程の欄内に印刷し、丁數は欄の左側に表丈に印刷し、丁度蒙古經典風になつて居り、上を横に訂成してある。訂成は元の儘かどうか分らない。馬太傳の表題は

Bidan-u ejen Iicus-Keris-tows-un Sine-Tis-tamin-ta-yin: Matfi-yin degedü arilogsan Yiwang-gili kemeküi angka debter ∴ olana tusa bolun: baragdası ügei amugulang dur kürküi düti mür-

iyen olan dur üjegülkü-yin tulada: Isak Yakob
Şimîd bi-ber egin-i orđigulhai ::

(我儕の主イエスキリストの新約聖書の、馬太の尊く聖き福音書と云へる首卷。衆生に利益あり、無窮の幸福に到る捷徑を衆生に示さん爲めに、イサク・ヤコブ・シミド吾れ之を譯せり。)

とあり、終りには刊記、

Sangpirtürbürge dur nige ming-a naiman ja-
gun arban yisüdüger on-a daruba: ::

(聖彼得堡にて一千八百十九年に印刷せり。)

がある。本文は五十九葉、百十八頁。約翰傳は表題

Iwan-a yin degedü arilogsan Yiwanggılı oru-

siba ::

(約翰の尊く聖き福音書是なり。)

となつて居り、刊記は無い。本文五十葉、九十九頁。これによつて、馬太傳はラウフェルの註記を證し得るが、約翰傳の出版年は分らない。もし余の見たる本が初刊時の合訂本であるとすれば馬太傳と同時になるだらう。所

でクラブプロット遺書目録六頁を見ると、馬太約翰兩福音書と使徒行傳とのシュミット譯本が二部出てゐる。これは合訂本らしい。合訂が原本の儘であるかどうかは、余の二種合訂本があるから断定し難いが、三種の譯本が殆んど同時かとは推し得る。それにしても遺書目録に馬可・路加兩傳譯本の存在しないのは偶然だらうか。コワレフスキがたゞ福音書と複數で舉げて二種か四種かを明記してゐないのは遺憾である。ラウフェルの馬可・路加兩傳の一八二一出刊の所據の明かになるを待つ外はない。たゞラウフェルの註記に、約翰傳・使徒行傳も出版されてゐ、皆シュミットの譯本なる事は補ひ得るわけである。

三 クラブプロットのウイグル

言語文字考

本書はコルヂエ・支那學書錄第四卷二七二八欄に次の如く出てゐる。

Abhandlung über die Sprache und Schrift der

Uiguren von J. v. Klaproth . . . Berlin, 1812, in-8,
pp. 96 et 1 Pl.

やうして注して

Voir également le Verzeichniss der Chin. und
Mand. Bücher de Klaproth, Paris, 1822, p. 189
et seq.

と云つてゐる。然しこの兩本の間には重要な増訂が行はれてゐるのだが、それは注してゐない。クラブロオト遺書目録五三頁には本書のベルリン一八一二年本二部、パリ一八二〇年本一部を載せ、二一九頁には「伯林王立文庫所藏漢滿圖書目録」二部を掲げてこの論文が附録として存する事を記してゐるが、これは表題を譯出したので、別に増訂の事には及んでゐない。又同書の著作年表の處にも三本はそれぞれ其年に懸けてはゐるが、矢張り増訂の事には觸れてゐない。たゞ單なる目録としてなれば其詳細は記するに及ばないのも固り其處であらう。然し重要な増補があるものは注記を闕くと、偶々以後世に誤を貽る事となり勝である、石田杜村先生の誤られ

た（歐人の支那研究、現代史學大系第八卷、昭和七年東京刊、二五〇頁）のも或はこんな事に起因するものであうか。

上記の伯林目録の表題は詳かに

Verzeichniss der chinesischen und mandschu-
schen Bücher und Handschriften der königlichen
Bibliothek zu Berlin, mit einer Abhandlung über
die Sprache und Schrift der Uiguren; von Julius
Klaproth. Abgedruckt zu 200 Exemplaren.

と題して、中の大題の所には

Paris, in der königlichen Druckerei. 1822.

と刊記が出てゐる。さうして此伯林目録附録ウイグル語言文字考の後記（Nachschrift. S. 61.）の初めに、クラブロオトは、「余のウイグル人に關する最初の論文は既に一八一二年東洋寶藏（Fundgruben des Orients）誌第二卷に印刷せられ、翌年又訂正増補して之を余のカウカズ旅行記に附録として收めたり」と書いてゐる。又同考五頁には「余のシベリア旅行に於て一八〇六年幸にもウ

イグル語が母語なる吐魯番人のウスト・カメノゴルスクに住せるを發見し、其口づから約九十のウイグル語を採集するを得たり。此語彙をトルコ・タタル語と比較して之を一八一二年余のウイグル語言文字考に於て發表し、東洋寶藏誌及びカウカズ旅行記第二卷に印刷せられたり。」と記し、「尙ほ後者より特に百部を抜刷したり」と註してゐる。尙ほ又彼の「對照亞細亞語彙」(Klaproth: Asia Polyglotta, Paris, bei A. Schubart, 1823 p. 214, note) には、「余は此語彙(これは高昌譯語なり、上記のウイグル語彙ならず)を獨譯し註を附して余のウイグル考の第三最後版中に印刷し、伯林王立文庫所藏漢滿圖書目錄の附録として發行せり」と明記してゐる。以上のクラプロオトの言ふ所を綜合すれば、彼のウイグル考は三本、即ち東洋寶藏誌本が一、カウカズ旅行記本が二、伯林目錄本が三、であつて、漸次増補訂正せられたもので、殊に第三本に至つて始めて吐魯番人によつて蒐集したウイグル語彙は高昌譯語に取換えられたのである。單なる再刊ではないのだ。

東洋寶藏誌の第二卷は一八一一年に始まり一八一二年に終る。彼のウイグル考は其第二分冊に收められてゐるから、多分一八一一年とする方が善からう。カウカズ旅行記は余は其原獨乙語本も佛譯本英譯本未だ見ざる所である。隨つて佛英兩本がこのウイグル考を附せるや否やを徵するを得ない。獨乙本はベルリン及びハレの刊本と云ふ。然らばコルデエ書錄、クラプロオト遺書目錄に出てゐる本考伯林本はこの第二本の抜刷本である。遺書目錄の巴里本は第三の伯林目錄本の抜刷本である。これによつて本考は三種あり、別に二種の抜刷があるを知るを得た。

四 アブル・ガジの伊太利譯

アブル・ガジ・ベハヅル汗の「土耳其系本」に就いては、ドーソンの蒙古史に解題がある(田中萃一郎譯補、ドーソン蒙古史上卷、岩波文庫本、昭和十一年東京刊。三七頁)。今日では多少の増補と訂正とを必要とする。コルデエの支那學書錄第四卷二七七〇欄以下には注記もあり、

佛獨譯などの譯本も出てゐて、之を補ひ得るが、尙ほ英譯本

A General History of the Turks, Moguls, and Tatars, Vulgarly called Tartars. Together With a Description of the Countries they inhabit. In Two Volumes. I. The Genealogical History of the Tatars, translated from the Tatar Manuscript written in the Mogul Language by Abu'l Ghazi Bahâder, Khân of Khovârazm. II. An Account of the Present State of the Northern Asia, as it includes Grand Tatar, (or the Countries possess'd by the Moguls and Tatars) and Siberia: With some Observations relating to Great Russia, Turkey, Arabia, Persia, India and China. With Two Maps exhibiting the Ancient and Present State of Grand Tatar. The whole made English from the French, with several Improvements and Additions. London, 1730. (Vol. II. London, 1729.)

を載せてゐない。これによると此英譯本は一七二六年ライデン刊佛譯本によつた事は明かである。此英譯本の外に伊太利語譯本も有るが固り漏れてゐる。

その伊太利譯本と云ふのは偶々余が丸善書店から求め得たる寫本であるが、表紙裏には舊藏者の藏書票がある。獅子牌の上に王冠が有り、下には「Auspicium Melioris Aevi」と刻せる勳章が有り、左右には羽あり鱗ある龍馬が立つて後足で「La Vertue est la seul Noblesse」と記せる長さものを引き合つてゐる。藏書票に味し余には分らなう。縦二十八纏半、横二十纏強の紙七四六頁に精細な字で書つてある。字體も紙質も余の知る所でないが、相當に古うものゝう。第一頁の表題は次の通り。

Storia/ Genealogica/ de Tatar/ Tradotta/ dal M. S. Tartaro/ di Albugasi-Bayadur Chan,/ et arricchita di un gran numero/ di osservazioni/ autentiche, e curiosissime/ sopra il nero stato presente/ dall' Asia Settentrionale;/ Con le Carte Geografiche necessarie, dal Sig. D. . . . / *Trud*

*otta del Francese sopra La (大明) / di Layde del
1726. / Con l'aggiunta delle osservazioni / del Tr
aduttore Italiano. / Venezia 1728. /*

下に線を引いた部分は抹削してあり、末尾の一七二八年の二の字も四の字に訂正した様にも見える。

本書は大題の示す如く一七二六年ライデン刊佛譯本を重譯したものである事は明瞭である。たゞ巻頭の *Epistole Privilegie* とを除いた丈である。表題末尾の云ふ所によれば伊太利譯者の増註があるのだらうが、余は未だ

之を詳かにしてゐない。たゞ本書の巻尾索引の次に圖版目録が出てゐる所を以てすると、増註を試みてゐるかも知れない。固り今の鈔本には圖版は一つも載つてはゐないのである。本鈔本はいかにも刊本から移寫したものの様にも見られるが、ヴェネチヤ刊本なるものが存在するのであらうか。博雅の士の示教を望む所以である。因に表題にアルプ・ガジ・バヤヅル汗とあるのは固りアルプ・ガジ・バヤヅル汗の誤記である。中は皆アブルになつてゐる。